

# 日本語教育の公共性とは何か —「ことばの市民」への道—

日本語教育学会2017年度春季大会（早稲田大学）  
2017年5月21日（日）

細川英雄  
（言語文化教育研究所八ヶ岳アカデミア）

## 発表のキーワード

- 「公共性」という概念について
- 言語教育の公共性とポスト・コミュニカティブ・アプローチ
- 日本語教育の実践活動と「専門性」との関係
- 日本語教育における公共性の意味と課題
- 言語活動による市民性形成：「ことばの市民」への道程

# 言語教育と公共性に関する私の関心

- 1995年、G.ZARATEの研究会PLIDAM (実践における言語とアイデンティティの複数性：習得と仲介 Pluralité des Langues et des Identités en Didactique : Acquisition, Médiations)でのヨーロッパ言語共通参照枠CEFRに関する議論から
- 民主的な社会、市民性形成(細川・尾辻・マリオッティ, 2017) 、 複言語複文化主義(細川・西山, 2010) 、 公共的であること…
- 2015年8月、欧州評議会取材、コミュニカティブ・アプローチからアクション・アプローチへ(学会2015年秋季大会・沖縄)

# 「公共性」という概念について

- official (公的), common (共通), open (開放) : 「互いに抗争する関係にもある」ものとしての公共性 (斎藤, 2000)
- ヨーロッパ言語共通参照枠CEFRにおける制度と活動— 矛盾体としての公共性の課題— 制度と活動をどのように捉えるか
- 公共日本語教育学— 「パラドクシカルな実践研究」 (川上編, 2017)

# 1 戦後の日本語教育の展開（細川，2002）

- **A)** 1960～70年代 構造言語学的（語彙・文型リスト，言語の構造・形式に関する知識，教師主導）：オーディオリンガル（パターン・プラクティス）
- **B)** 1970～80年代 応用言語学的（言語の機能と場面の関係，コミュニケーション能力育成，学習者中心）：コミュニカティブ・アプローチ（タスク，ペア・ワーク，ロール・プレイ，プロジェクト，CLT）
- **C)** 1990年代後半以降 社会構成主義的（自己・他者・社会，活動型教育，学習者主体）：ポスト・コミュニカティブ，「行動中心」アプローチ（リサーチ，内容重視，総合活動）

## 2 言語教育の専門性の変容

### —教育の方法・技術への特化と専門性の実体化

- 80年代以降、教育の方法・技術に特化—他の分野との乖離あるいは離脱—「閉ざされた専門性」
- 教師による学習の所有・占有の観念—「教えてあげる」というパターンリズム—正しさ, 規範, 「自然な」というイメージ
- 「日本語では普通…」 「一般的に日本人は…」 —文化本質主義的傾向—専門性の実体化
- 90年代以降、ことばの使い手—一人一人の日常と学習を結ぶこと, すなわち「状況に入れる」役割 (ハーバース) へ

### 3 学習者中心から学習者主体へ

80年代「**学習者中心**」：正解をめざすプロセスとして学習者が中心的に活動，正解への効率性や定着度を高める＝ルール・プレイ，ペア・ワーク，タスクなどの方法開発

90年代「**学習者主体**」：教育そのものの質的転換として提案，学習者の認識は学習者自身のもの．一つの正解をめざさない言語文化教育活動

言語教育の目的とは何か－「コミュニケーション能力育成」（言語知識+場面運用）の次に何があるのかという問い

## 4 ことばによって活動する人間への関心へ

人間全体への関心としてのポスト・モダンー言語の構造・形式や機能から、ことばと人間の関係をホリスティック(全包括的)に捉えるー人はことばを使って何をしようとするのかという根本的な問い

教育を、知識・情報を与えることから、思考・対話の場づくりへと  
転換ー学び手自身が納得解を得る

教室は、必要な知識・情報の入手の仕方を学ぶ、<学び方を学ぶ>  
(門倉, 2008)ための空間



# 学びの構造と展開



創造・展開

思考・対話

情報・知識

## 5 教師の役割とは何かー開かれた専門性へ

- 教師は何をするのかー教育の専門性とは何かー分析概念としての専門性
- 正解を示し教えるのではなく、学び手自身が自らの納得解を得ることができるような状況・環境をつくることー「開かれた専門性」へ
- すべての人がことばを使って何ができるかーすべての「日本語人」が日本語に関わることのできる「公共性」の可能性へー教室は、仮想の空間としての「教室外」のための訓練や練習の場ではない

# 人間の教育と言語の教育は同じ？

- 教育はすべて人間のためのもの、ことばはその入り口あるいは切り口
- ことばはすべての人間にとって不可欠のもの = 言語活動は、人間のすべての活動の基本的な要素・事柄
- 言語活動の充実・活性化を考えること = 人間の教育について考えること
- 教育内容の公共性 = だれもがことばを使って自らの課題を探究する方向へ目を広げることができる

## 6 公共性につながる日本語教育とは何か

- ことばの教育の目的の変容：社会的行為者として言語活動主体を捉えること／多様な他者とのさまざまな関係性を考えること／決して一つではない複数の自己アイデンティティについて考えること（欧州評議会，2003，2016）
- ことばの教育の場の目的＝対話的活動によって，自己・他者・社会について考えること
- 対話を軸に他者を受け止める，テーマのある議論をする，一人一人が持っている「経験」と興味・関心，よく生きるためのテーマへ＝活動の設計と組織化＝思考と対話の環境づくり
- 言語教育の活動の意味と目的とは何か－社会における個人のあり方＝市民性形成：ことばの市民になる

# 7 「ことばの市民」になる

—ことばの教育における市民性形成の思想へ

- 市民 = 社会の中の個人、市民性 = 自分が社会の一員であることを自覚する個人の認識のあり方
- 社会 = 複合的，重層的な複数のコミュニティの総体 = 個人が言語によって他者に発信する場はすでに「社会」 = 「公共の場」
- 「ことばの市民」 = 言語活動によって自分自身が一人の市民であることの自覚と，その市民的態度 = 市民性形成（細川・尾辻・マリオッティ，2016）
- 社会に生じる，さまざまな課題を解決する鍵も，ことばの活動とその教育にある

# 引用文献

- 門倉正美(2004). 「〈学びとコミュニケーション〉の日本語力」 (門倉正美・筒井洋一・三宅和子編『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房) pp.5-14
- 川上郁雄 (編) 『公共日本語教育学——社会をつくる日本語教育』くろしお出版
- 齋藤純一 (2000) 『公共性』岩波書店
- 細川英雄(2002). 『日本語教育は何をめざすか—一言語文化活動の理論と実践』明石書店
- 細川英雄(2012). 『「ことばの市民」になる—一言語文化教育学の思想と実践』ココ出版
- 細川英雄・尾辻恵美・マルツチェラ・マリオッティ (編) (2016). 『市民性形成とことばの教育—母語・第二言語・外国語を超えて』くろしお出版.
- 欧州評議会 (2004) 吉島茂・大橋理枝 他(訳) 『外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社
- 欧州評議会(2016) 山本冴里(訳) 『言語の多様性から複言語教育へ—ヨーロッパ言語教育政策策定ガイド』くろしお出版
- ハーバーマス, J (1994). 山口晃訳 『公共性の構造転換』未来社

# 想定される質問

- 理念、理想はわかるが、具体的な実践のイメージがわからない。
  - 1クラス40人の学生を対象にできる実践なのか。
  - 評価（成績）はどうするのか。
  - 初級者にも可能なのか。
  - 思考や対話のできない学生にはどうしたらいいのか。
- 
- あなたが自らの固有のテーマを持ち、それを実践しようという意思があるかないか。課題は、実践において、自分は何がしたいのか、何をめざして生きていこうとするのか、というテーマを見出すこと。一見バラバラに見える、上記の質問の共通点。